

二〇〇四年
鈴鹿市児童詩コンクール作品選集

じどうし

目次

優秀賞

四年

カプチーノ

コナンの散歩

ごみ、ごみ、だめだめ

ゆず

五年

いちばん大事なこと

一本の木

家族っていいな(大事な人)

すぎせんせい

大切な気持ち

友達っていいよ

みんなで一点

入選

四年

うそ

おもしろてつたしー

おばあちゃん

おめでとう

心の花

大切な人形

友達

7 5 4 3 2 1

友達のケンカ
友情

五年

ありがとう

いいのなか

いとこの れいちゃん

おかあさん

大人になつていく自分

学校 おもしろかったね

草

通学路の親切

仲間(石薬師イレブン)

雪

わたしの家族

わたしの大切な家族

(各々、題名のあいつえお順)

編集に際し

講評

審査委員長

清水 信

審査委員

津坂 治男

審査委員

北村 けんじ

審査委員

小倉 肇

編集後記

『優秀賞作品』

カプチーノ

鈴鹿市立牧田小学校 四年二組

小西 春香

カプチーノを見ると、

カプチーノの中に、ぐるぐると

白い物が、回っている。

十秒ぐらい見て、

目をつむって見ると、

回るのが、

いっしゅん、はやくなつたきがした。

中に物をいれたら、

たつまきの中にすいこまれているように。

まるで、ブラックホールのように、

すいこまれているように。

のむと、かわった味で、

味が、口に、すい入る。

まるで自分も、

カプチーノになったみたいだった。

まだカプチーノの味は、
今も、のこっている。

コナンとの散歩

鈴鹿市立飯野小学校

四年三組

渡部

大輝

コナンが走って行く
ぼくも走る

コナンが歩いて行く
ぼくも歩く

コナンがとまった
ぼくも止まる

コナンがふり向いた
ぼくもふり向く

半分青空、半分が夕焼けの空が、
水につけた絵の具の様に光っていた。

コナンとぼくが見つめ合った
コナンが笑った

ぼくも笑った
「コナン、帰るぞ。」

ごみ、ごみ、だめだめ

鈴鹿市立河曲小学校

四年

前川 早紀

ポイすてするやつ悪いやつ。

どうろ、いたいよ。

悲しいよ。くっさいよ。

車の中までくっさくて、

川の中までくっさいよ。

川ですてちゃ、

泣いちゃうよ。

お魚さんたち悲しくて、

お家がなくて泣いちゃうよ。

海まですてると、

お魚さんは、へっっちゃうよ。

どうろにすてると、

みちに来る人がいなくなっちゃう。

ポイすてきんし、だめですよ。

やめると、町じゅうきれいです。

ゆず

鈴鹿市立栄小学校 四年一組 平川 優香

今日、ゆずといっしょに起きた。

ゆずの鼻をさわったらつめたかった。

それで、はなしたら人間にたいに

「クシュ。」

といった。人間みたいにくしゃみをしてた。

ちよつと笑えた。

鼻をふつて

「クシュ。」

といった。おもしろい。ちよつとふしぎに思えた。

ゆずは、ジャツキーを食べる時も人間みたいにしっかりかんで食べている。

ゆずは音ですぐ人が来た事がわかる。

ゆずは音だけでわかって人間よりすごい。

いちばん大事なこと

鈴鹿市立神戸小学校 五年二組 大村 春奈

私は剣道を始めて二年目

どんな寒い日も剣道どんな暑い日も剣道

目標は

だれよりも強くなる事

毎日、公園でひとりで練習する

強くなっているのかどうか

自分ではわからない

筋肉つうに泣く

私はこれでいいのか

私は毎日なやんでいた

今も剣道をしています

いつもそのように切り返し

面 小手 胴打ち

先生が「集合。」と声をかけた
みな走って集まる

先生は

きみたちは努力を

知っているか

剣道はただ単に

やってもまったく進歩はない

一回一回を自分のプラスにしよう
と

先生の言葉は一年たった

今でも覚えていて

一番大事なことは

一回一回を大切にすること

そして、こつこつ

自分のプラスにすること

私は今

心を集中して

この一ふりに心をこめる

これが私の大事なことです

一本の木

鈴鹿市立飯野小学校

五年

三村

真由子

私の家にあるセンダンという

一本の木

私が小学校に入る前から

ずっとある

どこからか飛んできた

その一本の木の命

だれが植えたわけでもなく

自然にはえている

センダンの木

それからぐんぐんのびて

私が小学校に入る前の背の高さが

木にきざんである
毎年夏の終わりには枝を切り
毎年大きくなつていく
今、もう二階のベランダから
木の枝にふれることができる
私が成長するより早く
どんどん大きくなる
いままでいつしよに
私の成長と共に
大きくなつてきた木
私が何才になるまで
いてくれるだろうか
私の大切な
一本の木

家族つていいなあ（大事な人）

鈴鹿市立鼓ヶ浦小学校 五年

嶋村 綾菜

ねむれない夜・・・

お父さんとお母さんの所へ行くと
足音もたてないのに

「どうしたの？ねむれない？」
と聞いてくれる。

「うん」とうなづく

お父さんが、ねる所をかわってくれ
お母さんのとなりで、ねると

一人でねる時よりも

二倍も十倍も百倍も、安心できる
そして、少しずつねむたくなってくる。
心の中でもうねているお母さんに、
「おやすみ」

すずきせんせい

鈴鹿市立鈴西小学校 しいのみ まつやま まさひこ

すずきせんせい
げんきになつて
がつこうへきてね
まってるよ
はたけでとれた
にんじんとたまねぎをとんとんきつて
かればーていしようね

大切な気持ち

鈴鹿市立河曲小学校

五年三組

嵯峨崎

香織

あいさつをはずかしがっていた私
なにもかもはずかしがっていた私
ある日、
「ピンポン。」
ドアを開けたら
ご近所の人だった。
明日から

入学する一年の子どもをむかえに行く。

あいさつをしなくちゃいけない

それを思うとしんぞうがとびだしそうだ。

ああ、はずかしい

朝、むかえに行くと、

「おはようございます。」

と言われた。

「おはようございます。」

やっぱり小さな声しか出ない。

あいさつなんてできないよ。

次の日、

思い切って、

「おはようございます。」

すうつとはずかしいのが消えた。

あいさつが言えた。

そしたら笑顔で、

「おはようございます。」

と言ってくれた。

この日から。楽しい朝が始まった。

友達っていいよ

鈴鹿市立白子小学校

五年A組

山門

玲菜

いたい、いたい いたい
うでがジンジン いたい

友達がとんできた

うでが、木の枝になっていた

保健室に行っても
みんな大じょうぶ
と言ってくれた
シンとしていて
木の葉がカサコソ、
しゃべっていた

入院している時も
手紙を送ってくれた
そのおかげで
木の枝のうでも直った
友達がいてよかった

みんなで一点

鈴鹿市立郡山小学校

五年二組

大山 哲弥

「ぜったい勝つぞ。オー。」
みんなで円陣を組んだ。
大声でさけび、気合いを入れた。

キックオフのホイッスル。
ぼくは左のミッドフィールダーだ。
ピンチのときはディフェンス
チャンスときはオフエンス
走り回るのが役目だ。

「集中しよう。」
みんなで声をかけ合う。
でも、ぼくのミスで点をとられた。
落ち込んで下を向いていると、
みんなが「ドンマイ、ドンマイ。」
じーんときて、力がわいてきた。

「まかせたぞ。」
ぼくのパスがフォワードにつながった。
フォワードが決めてくれた。
パスをつないでみんなでとった一点だ。
タッチをしあって大喜び。

(入選作品)

うそ

鈴鹿市立飯野小学校 四年三組

渡辺 翔太

ぼくはうそをついた

どうしようどうしよう
おこられるのがこわかった
まるで運動会のかけっこみたいに
どきどきした
心ぞうがはれつしそうだった
おこられるこわさより
うそをつくこわさのほうが
ずっとずっと大きい
どうしようもなくなつて
本当のことを言った
今度は本当におこられた
これから
もうぜったいにうそはつかない
そう自分に言いきかせた

おしろてつたしー

鈴鹿市立旭丘小学校

四年C組 奥野早也香

おしろてつたーお

しーし
しーし

おーお

のおかしさ

かがしーし

がしさの

ののしなか

ながの

こなながみ

弟くれた

初めてくれた

こなながみ

わからないけど

おもしろい

おしろてつたしーお

しーし

しーし

おーお

のおかしさ

かがしーし

おおになか
ながの

五才の弟
手紙をくれた
初めてかけた
ひらがなかけた

ふしぎなことは
たのしいことは

じゅもんみたいなことは
とっでもうれしいことだった

おばあちゃん

鈴鹿市立深伊沢小学校

四年

香西

志保

お母さんが仕事でおそいとき

おばあちゃんがご飯を作ってくれる。

おばあちゃんありがとう。

時々、遊んでくれてありがとう。

おこずかいくれてありがとう。

だけど、庭で石につまづいてけがしたね。

だおいじょうぶかな。

早くよくなってね。おばあちゃん。

おばあちゃん、

長生きしてね。

おめでとう

鈴鹿市立鼓ヶ浦小学校 四年A組 太田 栞

かも田先生けっこん

「おめでとう」

みょうじがかわり

岡先生になりました

これからもよろしくね

岡先生

だんなさんと

お幸せに

みんなのあこがれの

かも田先生

「おめでとう」

心の花

鈴鹿市立加佐登小学校

四年松組

福元

喬教たかのり

自分たちで、
育てた花には心がある。
心のある花には、
やさしさがある。
やさしさのある花には、
いいかおりがある。
いいかおりの花には、
うつくしさがある。
うつくしさのある花には、
色がある。
色がある花には、
気もちがある。

大切な人形

鈴鹿市立牧田小学校

四年一組

三浦

美樹

一年の時に買ったんだ
小さい ぐたくた人形
目がとても丸い
かがやいている
いつか動いてほしい
じつと見ていると
動いている感じ・・・
泣いている時
なぐさめてくれてる感じ・・・
大好きなんだ
かわいいんだ
ずっといつしよにいたいんだ
大切な人形だから
いつまでもずっと
私のこと
わかってくれてるから・・・。

友達

鈴鹿市立長太小学校 四年

足立

爽華

わたしには、仲のいい三人の友達がいる。
一人は、おとなしくて絵がじょうずな子。
一人は、のんびりやさんでやさしい子。
一人は、にぎやかで元気な子。
三人ともぜんぜんせいかくがちがうけど、
いっしょにいると楽しい。
もつともつと、いっしょにいて、
もつともつと三人のことを知りたい。
三人とも大すきだから。

友達とケンカ

鈴鹿市立明生小学校

四年二組

楠木

克弘

サッカーをした、

キーパーはぼく。

友達がかった。

ゴールした、

一点はあった。

キーパーダツシュのしすぎで、

ケンカになった。

いつのまにか仲間おりしていた、

ボールが飛んできた、

ぼくは、うけた

ボールを、かった。

友達をとった。

でも、

ケンカした友達と仲間おりできて、

すごくよかった。

友達といっしょにまた遊びたいな。

友情

鈴鹿市立若松小学校

四年一組

小林 琴美

わたしは手が挙げられない。

「どうしよう。」

手を挙げるのがはずかしい。

そしたら後ろから声がある

「わたしも挙げられない。」

尾崎さんがいつている。

尾崎さんが手を挙げた。

先生にあてられた。

はずかしそうにいつている。

すわってわたしを見ている。

「がんばれ。」

と言ってくれた。

手を挙げた。

わたしは思った。

友だちの友情でいいな。

ありがとう

鈴鹿市立河曲小学校 五年三組

川上 朋希

青い空の中にうかが太陽が、
ぼくたちを照らしている。

歩道橋の階だんを重そうな荷物を持って
上がっているおばあさんがいる。

ぼくは、

「その荷物を持ちましょうか。」
と声をかけた。

おばあさんが、

「ありがとう。」

と行って、

荷物をぼくに渡した。

ぼくは、

おばあさんといっしょに
歩道橋の階だんを上がり
歩道橋を下りる。

おばあさんはまた、

「ありがとう。」

とぼくに言った。

ああ、

うれしい。

ぼくは幸せだ。

青い空の中にかがぶ太陽が、
ぼくを照らしている。

いいのかな？

鈴鹿市立椿小学校

五年

矢田 麻衣

いいのなか？

人をなぐつて

いいのかな？

ゴミをすてても

いいのかな？

いけないことだとわかっていても、

ついついやっっちゃう

人がいる。

いいのかな？

人を殺して

いいのかな？

森がなくても

いいのかな？

いけないことだと思っているのなら
いわなきゃいけない

「ごめんなさい。」

この地きゆうを守るのは、
人間や生き物なのだから。

いとこの れいりちゃん

鈴鹿市立櫻島小学校

五年C組

荻野 可菜

とことことことよく歩く

あとから私もついていく

こけるとあららあわてておこす

するとまたまた

とことことことまた歩く

うるうるうるみで歩く

とことことこと歩いてて

最後にママにしがみつく

かわいい、いとこのれいりちゃん

おかあさん

鈴鹿市立牧田小学校 五年一組 コルドバエ ステファニアニ

それから一本のばらがおちてきた。

おかあさんはそれをひろって、

かみのけにかざった。

とてもよくにあった。

わたしはそんなおかあさんが

だいすき

大人になっていく自分

鈴鹿市立神戸小学校

五年二組

杉山

恵梨

たんじょうびは

一年に一回

世界中のみんなにきます

たんじょう日には

一つ大人になります

誕生日には

決意をします

去年の私の決意は
なわとびの二重とびが
とべるようになること
一回もとべなかつた私が
最高十二回もとべました

去年の私は
自分だけの決意だった

今年の私の決意は
伝記の本をたくさん読み
人々のためになることをすること
そして

笑顔で自分から
大きな声で
あいさつをして
自分の周りの人にも
気持ちよくすることです
今年の私の決意です

十一歳の私が
決意しました

今年の私は
変ります

学校 おもしろかったね

鈴鹿市立神戸小学校 たんぽぽ

本田

聡そう

学校へ おともだちと いくね。
あるいて いくね。

8時15分 たんぽぽ いく。

レイコ先生 たんぽぽ いかないの。

聡ちゃん ぼく ひとりで たんぽぽ いく。

10時20分 4番セブンスステップス かける。

1時5分 5番ビリーブかける。

給食 たべる。

さん、はい、いただきます。
牛乳のむ。パン2こね。

3時40分 帰るよういして

3時45分 かいだんおりる。
学校 おもしろかったね。

草

鈴鹿市立栄小学校

五年二組

田口

祐治

もういやだ

草なんていやだ

きつてもきつてもまたのびる

ぬいてもぬいてもまた生える

なんどきつてもきつても

ぬいてもぬいてもまた生える

どこからそんな力が出てくるんだらう

ほくもこんな力があるのかな

通学路の親切

鈴鹿市立合川小学校 五年

早川 香奈恵

通学路、毎日同じ道を歩く。

春、

なれない一年生のためにゆっくり歩く。

夏、

あつくてのろのろ歩きの子のランドセルをそっとおす。

秋、

虫をおいかけよそ道にそれていくそうな子をつれて歩く。

冬、
ころんでかがをした子のランドセルを持って歩いた。

仲間（石薬師イレブン）

鈴鹿市立石薬師小学校

五年二組

平田 拓哉

なんでだろう

たった一個のボールを輪になって

夢中になってけている

それが仲間 石薬師イレブン

なんでだろう

寒い、寒い、外はまだ暗い
だけどもみんなかけている
それが仲間 石薬師イレブン

なんでだろう

試合で負けても

テントの中はいつも笑顔だ

それが仲間 石薬師イレブン

雪

鈴鹿市立飯野小学校

五年

山本

夏美

冬の寒い日に
空から雪がふってくる
小さな小さな雪のけっしょうが
空から地面へふってくる

小さな雪のけっしょうが
地面にたくさん集まって
あっというまに
地面の色を
まっ白にしてしまう

地面を真っ白に積もらせた
小さな雪のけっしょうで
遊ぶのが
とっもとっも
大好きだ

わたしの家族

鈴鹿市立牧田小学校

五年二組

矢板橋

春菜

昔はやせていたけれど
今はちよっぴりおでぶ
家族のために
よく働くけれど

パソコン、ドライブ大好き

お母さん

ちいさいけれどよくしゃべり

だれとでも友達になれる

ゆかいなお母さん

でも少しこわい

姉

同じ年で

のんびりせわやき

うるさい姉

でも仲良し

じいちゃん

目は大きくお酒大好き

子どもにすかれ

よく遊びお茶目なじいちゃん

おじいちゃん

長生きしてね

おばあちゃん

いつもおいしいご飯を

作ってくれる

歯がぬけている

笑うとちよっぴり

かわいいな

私

負けすぎらいで

がんばりや

子ども、ピアノ、遊びが大好き

でもおしゃべりにがて

夢は保育士

夢はかなうかな

私の家族

いつも楽しい六人家族

ずっとこんな

家族でいたいな

わたしの大切な家族

鈴鹿市立郡山小学校

五年

野間

香織

私は四人家族。

でも、今年から7人家族になった。

13才はなれたお姉ちゃんが、赤ちゃんをうんだので、今うちで一緒にくらしている。

私は、おいの晃輝（うらき）の面倒を見ることになった。

晃輝（うらき）は、もうすぐ2才。

私の弟みたいで、かわいい。
家に来た時はうれしかった。
でも、いたずらばかりする。

台所のいすに上がったり、玄関のかぎを外して勝手に外に出てしまったり。
危なかしくって、いらいらしてしまう。

おこらないように・・・と心の中で決めても、いつもおこってしまう。

今まで静かだった私の家族は、急ににぎやかになり、さわがしくなった。

今日も、となりの部屋で赤ちゃんの泣き声が聞こえてくる。

お姉ちゃんもお母さんも、赤ちゃんの世話で大変だ。

にぎやかな家族。

いろいろなことが起こる毎日。

でも、私の大切な大切な家族。

晃輝の世話をがんばってしようと思っている。

選評

『JUNの動き』

審査委員長 清水 信

（ひみず まいど）

よい詩はよい心の動きに反応している。心の動きは感動である。

予想をはるかに越える多くの応募を得て、選考委員一同うれし悲鳴を上げたのだが、その多くはテーマが先行していて、「友情とは何か」「家族の絆とは何か」「ネットはいかに可愛いかが」「スポーツはどんなに楽しいか」といった問いに対する答えが用意されていて、それでは平板になってしまう。

常識や頭の理解から、詩情がはみだすことがないからである。先ず感動した事実があつて、その事件やモノや人の心の動きから書き出さないと、詩はつまらないものになってしまう。具体的なモノや、人間関係が先行しなければいけない。難しそうなことを言っているが、授賞式の時は、もっと分かりやすく話してみよう。しく簡単なことである。現に「在るもの」から話し出せばいいのである。

詩のよさは作り手の頭の上には関係がない。それよりも、眼や耳が外に向かつて素直に開かれていつかどうかに係っている。鈴鹿の気候や風土は詩に大変適しているのだといふことも、忠告しておきたい。

文芸評論家。小林秀雄、荻原朔太郎の薫陶を受け、「当世文人気質」で第三回近代文学賞受賞。名古屋で「北斗」を創刊、多くの評論、小説を発表。同人雑誌「センター」主宰。著作に「清水信文学選」(全一〇一卷)ほか。小説・新聞・雑誌の文芸評論、文芸講演などで活躍。鈴鹿市在住。

『いつも見ため、考えて』

審査委員 津坂治男

(つむか はるお)

ひさしぶりに、楽しい勉強をさせてもらいました。どの詩にも心がもっていました。その中から、どんな時、どう思ったかといふ、感動の様子がよく出ているのを選びました。

生き物や身のまわりの物と接する、スポーツにうちこむ、また友だちや家族と本気でふれあう、そんな場面での気持ちがつまぐ言葉に結晶しました。「チンこの散歩」「一本の木」など、いつも心から可愛がったり、見つめ考えていたからこそ書けたのでしよう。サッカーや剣道などをやる過程で成長していく様子も読み取れて頼もしかったです。

一方、心そのものをえがいて詩にするのは簡単ではありませんが、「うそ」や「大切な気持ち」はいつも自分と対話している様子がうかがえ、共感しました。

環境や人間関係など、現代の問題と向き合っている詩もあり、「こみ、こみ、だめだめ」「やいのかな」など、精一杯考えていることがわかります。入選には至りませんでした。不登校の自分、「いじめ」といふ作品もあり、読みながら声援を送りたくありました。もちろん、友だちのすばらしさや

自然の美しさをうつたつ詩もいろいろあり、これも大事なことだと思いました。

詩は、思いをまっすぐ人に伝える立派な仕事です。これから、まわりや自分をよく見つけて考えて、書いていきましょう。どうすればきちんと伝えられるかも、勉強していきましょう。

詩人、第十回小熊秀雄賞受賞。日本文芸家協会 白ペンクラブ 白本現代詩会 白本詩人クラブ等会員。作品に「津坂治男詩集」(土曜美術社出版販売)、かど創房ほか、「詩集」パラダイス(書肆青樹社)「詩集 月」(現代詩人社)「鎮魂と癒しの世界 評伝伊藤桂一」(詩画工房)、少年詩集「大きくなったら」花が咲いたよ「新町小学校」(教育出版センター)など多数。鈴鹿市在住。

『小さな言葉から深い思い』

審査委員 北村けんじ きたむら 憲次

友だちがいかに大切なものであるか、家族の温かみがいかに深いか、また動物やしぜんのいのちのたわりの気持ちなど、どの作品からもよく伝わってきました。そして改めて共鳴しました。たとえばなにげなく小さな声でかけた、またかけられたあいつの言葉、その瞬時の喜びは、言葉に表現してこそ伝わり、お互いの胸のうちにさわやかな気分が流れます。

詩には大げさに叫ばなくてもいい。また作文をぶつぎりにしたような無理をする必要はありません。ささやきやつぶやきから発していけばいい。その小さな言葉が、しだいに大きな世界につながるのです。

今回は、四年、五年からの応募でしたが、五年はさすが五年です。一年先ばいであるだけに、その内容や表現に、面目を保っていました。胸にひびき詩を書くには、友だちの詩を読むことです。そのために今回の入選作品集を読み味わうことはとてもいい機会です。また日常生活のなかでふと感じたこと、思いついたことを、日記に記録のはしに書き留めていくことも大切なことです。詩想や詩を作る有効な動機となります。ぜひ試みてください。この先、入選作に曲をつけてCD化する計画もあると聞いております。鈴鹿の子どもたちから生まれた曲が、みなさんのくちびるに乗り、地域に広がっていくことを心から期待しております。

児童文学者、日本児童文芸家協会理事。作品に「まほろしの巨鯨シマ」(理論社)「小さな小さな海つさぎ」(新日本出版社)「五月の絵本」(新日本出版社)、「なきむしクラスの」とうしよう」(フォア文庫)、「わたしはのらねこてんとうせい」(金の星社)、「四年一組わらったあかんぐえ」(金の星社)など多数。在住。

『 審査委員 小倉 肇 おぐら はじめ』

国語教育研究者、紀伊長島町教育長。三重県文化振興事業団評議員。日本児童文学者協会会員。みえ熊野学研究会運営委員長。南方熊楠、東紀州の自然、歴史、神話、古道、祭りの研究者。学校国語教育に講演多数。著書に『愛と炎の記憶』(三一書房)、『沢村栄治ものがたり』、『たねまきこんべい』、『松尾芭蕉』、『大学やめてもつちやら』(以上いずれもサエラ書房)、『みえ東紀州の民話』(伊勢文化舎)、『三重の風土記』など。紀伊長島町在住。

編集に際し

各作品は可能な限り、原文のままに留めるといたしましたでしたが、句読点、行間隔、改行などで若干の修正をしていくところをお含みおきください。

掲載作品の児童の所属は、二〇〇五年一月末現在(応募作品提出時)での表示です。

掲載は順不同です。

編集後記

この鈴鹿市児童詩コンクール作品選集は二〇〇三―二〇〇四年にかけて鈴鹿西中タリークラブ創立二十周年と中タリー誕生百年を記念して実施した鈴鹿市児童詩コンクールの優待賞および入選作品を編集したものであります。

鈴鹿西中タリークラブはその記念事業に地域社会活動の一環として子ども達の働きかけを実施することに致しました。昨今、児童の基礎学力の向上が叫ばれ、市内小学校では様々な取組みがされていることを確認致しました。鈴鹿市は夏は来ぬに代表される佐佐木信綱を生んだ地であり、児童詩を拓いた北原白秋は『やもは天性の詩人です。』と記し、『ピアジェも子どもは大人の縮図ではない。子どもの知恵も大人の知恵を小さくしたものではありません』と述べています。こうしたことを踏まえて、子どもたちのみずみずしい感性をもつものを見つめ、表現する力の向上に役立つことを期待し、鈴鹿市児童詩コンクールを開催することに致しました。

児童詩コンクールは、市立小学校の鈴鹿市内小学校の四・五年生とし、表現方法にこだわらない自由詩で、形式は自由、四行以上四十行以内としました。世界の中タリークラブ会員が行動の規範としているものに、『四つのテスト』があります。それは、『真実かどうか、みんなに公平か、好意と友情を深めるか、みんなのためになるかどうか』という言葉です。(次頁掲載)小学校四・五年生向けに、それを子ども用に敷衍して、できれば『わたし(ぼく)がいちばん大事なこと。(本当のこと)。正しい行い(フェアプレイなど)。ともだちについていいな。すばらしいな。みんなへのしんせつ(入)のためになるよ(こび)。』などを考え、テーマを選んで欲しいが、タイトル題名は自由としました。特に、障害を持つ子どもや外国籍の児童の参加を要請しました。

本事業後援の市教育委員会、鈴鹿西プロバスクラブのご協力を得て、市内小学校校長会、市教職員組合、鈴鹿市教育研究会の皆さま、取りわけ小学校四・五年生の担任の先生方から格別のご協力を頂いた結果、当事者の予測をはるかに上回る対象者三、九〇三名のうち二、七一六点参加率約七割という応募がありました。

応募作品は、清水信、津坂治男、北村憲次(けんじ)、小倉肇の各先生に全点審査を頂きまして、優秀賞十一人と入選二十一点の選考がされました。作品は関係者の期待通り、児童が持つ明るさ、優しさ、愛くるしさ、屈託なさ、しなやかさ、素直さ、清澄さ、鋭さ、稚拙さ、未熟さ

などの感性で、ものを見つめ、考え、思ったことをそのまま文字で表現しています。そうした中で応募頂いた市内小学校の先生方から、作品を教材に使いたいとお話を伺いました。感性豊かな心象表現に触れた喜びと感動を、当事者に留まらせることなく、子供たちの輝きを広くお伝えしたく『鈴鹿市児童詩コンクール作品選集』として発行することに致しました。基礎学力の向上を希求しての事業が、広くお役に立つことを期待するものであります。

あらためて今回の児童詩コンクールに関係された各位に心から御礼と感謝を申し上げます。

二〇〇四年三月

鈴鹿西中タリークラブ 二〇〇三 二〇〇四年度 会長

河田 勝正

鈴鹿西中タリークラブ 創立二〇周年記念事業実行委員長

松本 裕夫